

LNG 短期調達パターンの進化と中期期間の需給関係に関する 諸見解について

Changing patterns of LNG procurement and diverse views on medium-term
balances of demand and supply

橋本裕 *・小山司 **

Hiroshi Hashimoto, Tsukasa Koyama

1. まえがき

LNG 調達は伝統的に長期契約により安定的な引き渡しを基本としているが、特に原発停止後の追加需要対応を中心に、柔軟な需要変動対応が必要となり、従来から長期契約に組み込まれている弾力性に加えて、スタンド・アローンのスポット貨物トレーディング、短期契約、マルチ・カーゴ（複数貨物）契約の重要性は増している。

2. 短期取引パターン直近の状況

日本の LNG 輸入量・輸入金額は 2011 年 3 月の福島第一原発事故・原発稼働方針迷走により、これまでほぼ一貫して増加してきた。欧州では景気低迷に加え、石炭火力発電・再生可能エネルギーに対する競争力の低下により、天然ガス需要全体として大幅に減少している。

欧州ガス買主は、一方でパイプラインガス、LNG 供給者との長期契約価格の再交渉で引き下げを実現するとともに、相対的に安価に購入契約している大西洋地域産の LNG を、アジア、南米に仕向け変更、再輸出の形で転売している。

世界の LNG 貿易量全体としては第 3 四半期までに 1.76 億トン程度と、前年同期比 3%、500 万トン程度減少している。2009 年から 2011 年の世界の LNG 産業規模の 30%強拡大という急成長が、一服した感がある。

日本は輸入量が増加しているとはいえ、早期の原発稼働再開が困難との見通しから、代替 LNG について、スポット購入主体から短期・中期契約への切り替えが進みつつある。

3. 構造変化

短期的な LNG 調達活動の変化を可能とする長期的な構造変化としては、次の点が指摘できる。

まず、中東、大西洋地域の流動性高い供給力の大幅増加

* (一般財団法人) 日本エネルギー経済研究所
石油・ガスユニット ガスグループ主任研究員
〒104-0054
東京都中央区勝どき 1-13-1 イヌイビル・カチドキ 10F, 11F
e-mail: hiroshi.hashimoto@tky.ieej.or.jp
***同研究員

がある。米国の天然ガス需要増加を期待して、2005 年前後に多くの LNG プロジェクトの投資決定がなされた。同時に、米国内でもシェールガス開発が進展し、大幅な生産の増加につながり、前記の米国向けに開発された LNG プロジェクトが販売先を失った。この大きな供給余力と、突如発生した日本の追加需要のタイミングが一致した。

次に、2000 年以降は生産国、消費国とも、さらにプレイヤーの数も、数量とともに大幅に増加したことが、取引経路を多数化・複雑化させることにつながっている。

また、一部の大手プレイヤーが複数の生産国、消費国、さらに生産・消費の両側にまたがりポジションを確保して、世界の様々な地点で調達・引き渡すことができる状況となったことも、流動性を高めることにつながっている。

一方消費国側では、ガス・電力事業ともに自由化市場の拡大により、短期フレキシビリティ要請が増している。

4. 今後を見通す

長期的に LNG 市場を見ると、新規プロジェクトの立ち上げのためには、引き続き長期の引き取りコミットメントが必要となる。

また、2013-2015 年の期間についても、日本の原子力欠落分補完のための追加 LNG 調達について、中・長期的な契約へとシフトしている。

豪州からの多数のプロジェクトに加え、2015-2016 年以降は、北米からの LNG 輸出プロジェクトが立ち上がり、これらは、いずれも仕向け先に関する柔軟性を備えることとなると予想されるので、各消費市場の価格動向に応じて物流は変動することとなると期待される。

5. むすび

日本の LNG ビジネスに関わる企業は、今後拡大が予想される柔軟性供給力を十分活用・コントロールしていけることが、最重要の課題となっている LNG 調達全体の価格をコントロールしていくための交渉のひとつのテコともなる。